

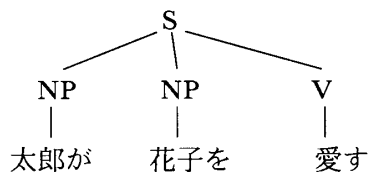
## 日英語の比較をめぐって（その1：序説の1）

宇 納 進 一

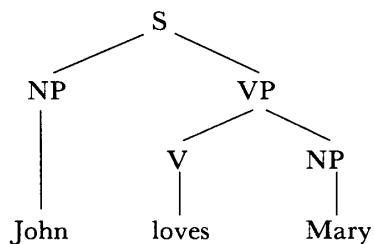
**Abstract:** An attempt will be made to describe some Japanese grammatical items and their English counterparts. The present paper is also an attempt to explore the possibility of “the comparison as a method”, which, by way of sound empiricism and not via rigorous universalism, aims at the realities of languages. Focus will be on how they (grammatical items in question) are used, and hence the descriptions will be “semantic” in some specific sense of the term, which is to be explicated later in this paper. “Sono 1 (josetsu 1)” in this volume is the former half of the discussion on the metatheoretical and/or methodological preliminaries to what will be presented in the subsequent sections.

1.0.1. 少なくとも、表面的な姿を見ている限り、日本語と英語の文の基本的な仕組みには何か大きな隔たりを感じないわけにはいかない。しかし、その一方で、主として生成文法理論による研究では、日本語も意外と英語によく似た文の基本構造を持っている、という議論も多くなっている。

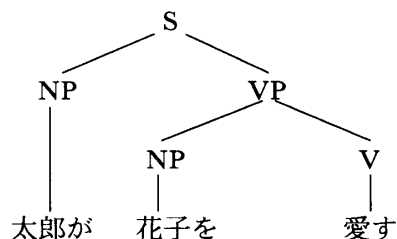
一例として、日本語も英語と同様に動詞句節点 VerbPhraseNode が存在するのだという主張を挙げることができよう。すなわち、従来考えられてきたような平坦な文構造 Flat Structure である、



ではなくて、日本語も英語の、



とパラレルな構造、



を持っているとする。日本語は語順が自由だ、という古くからの通念があり、これに応じて生成文法でも、従来はスクランブリング Scrambling と呼ばれる単純に構成素の順序を入れ替える規則が想定されていたのに対して、VP 論者はスクランブリングも通常の「ムーブメント Movement」、すなわち、英語にあっては疑問詞を文頭に移動させるなどの働きをする規則と同じモノであり、「痕跡 Trace」を背後に残し、移動されるものは所属する S 節点に「チョムスキー付加 Chomsky-Adjunction」される、とする。これだけのものを前提にして、「数量詞浮遊 Quantifier Float」や「弱いクロス・オーバー現象 Weak Cross-over」などが（被移動体とその痕跡の間には一定の「構成素統御 C-command 関係」がある等という形で）VP 節点の根拠として提示されることになる（以上は主として Nemoto[1999]による）。

このような主張に対して、本稿は今ここで異議を唱えようとしているのではない。しかし、こうやって、動詞句節点の存在根拠を示されても、その表層における不透明さは否めず、依然として日本語と英語は文の基本構造において何らか目に見えた違いを持っているのではないか、という思いは払拭されない。しばしば二重主語構文という不適切な用語で呼ばれる現象もある（象ハ鼻ガ長ヒ）。これらにも生成文法的な研究はおこなわれているがこれも後に見るように今ひとつすっきりしない。また、類型論等でいわれるところの主題優位言語と主語優位言語という違いと生成文法における分析との間には現在どのような橋渡しが行われているのかも定かでない。

以上は、生成文法を代表とする現代の文法研究の展開の一例として挙げたのである。そして、それに対してはなほだ学術論文としてはあるまじき印象的・直感的なかたちの感想を述べている。しかし、それらの印象、直感に対してはある種の日常的な裏打ちのようなものもあるのではないか。すなわち、たとえば、こういった研究成果はさしあたり、殆ど日常的な効用というものを持たない。とにかくそれは専門的な知識なのであって、様々な理論装置・概念体系に支えられてあるような「ある知識」である。（上に挙げた用語を括弧書きしたのはそれを示すためでもある。）例えば、語学教育にこれらの知見を応用して、学習者の言語と目標言語の間に効率的な橋渡しをして、当該言語の習得を促進する、といった適用例はあまり世上に観察されることがない。人間の言語（L1、L2 すなわち母語、外国語の双方において）の習得過程の研究もまた理論的研究としては盛んになりつつある一方でそうなのである。今や人間の言語の構造が大いに科学的に明らかになりつつある、という文法家たちの自信に満ちた議論（例えば、Baker による「メンデレーエフの周期律表に比肩し得るような知の進展」というような発言）とその応用的効用の不在という二つのものの間のこの大きな落差をどう捉えるべきか。物理学の進歩は原子爆弾という人間自らを滅ぼし得るほど強力な応用を持つ。

もちろん、生成文法はもともと応用に対して冷淡である。生成文法発展の歴史的過程では外国語教育や機械翻訳という工学的研究の面での革新を期待する人たちは実に多かった。その期待は極めて大きく、そして、裏切られることも例を見ないほど大きかったのである。期待するほうが悪い、というのがチョムスキーの一貫した態度である（このあたりの経緯は拙稿「チョムスキー・ノート」にいくらか概観した。チョムスキー自身の発言例についてもそちらを参照されたい）。そして、その点でチョムスキーはまったく正しい。言語という研究対象からしてそれは当たり前のことだろう。理論的研究とその実用的応用の間の関係が、化学や物理学とはまったく違うのである。理論が多少なりとも正しければ、幾許かの応用ぐらいあってもよいのではないか、と思う人は人間の言語というものを知らない。こういった言語学者の応用への無

関心がよく示すように、本稿が上に述べてきたようなことは、勿論、学理的には無意味なことである。言語の科学的記述と言語に関する一般理論の確立のみが真に有意・有為な言語研究である。

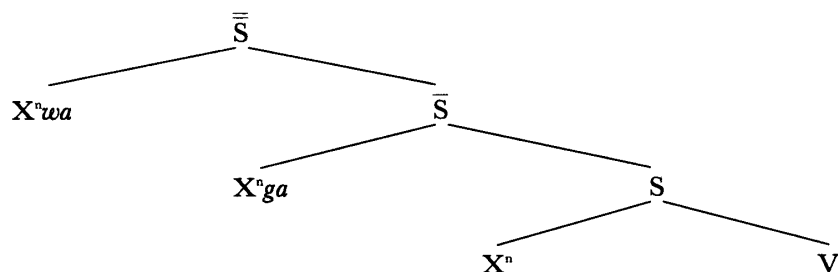
それでもなお、今少しく、上のような設定の話を続けたい。自然科学とは研究対象が違い、その理論的研究は一筋縄では行かないのである、ということは肯んじて、それならば、そもそもそのようなものがどうしてかくも自信に満ちて「科学的」研究の対象とみなされうるのか、という異論はありうるのではないか。

1.0.2 生成文法の枠組みで日本語や英語が研究される時、その目標は普遍文法の構築である。しかし、言語研究が本来的に持つ手ごわさに鑑みる時、すべての研究者がそのようなアプローチをとらなければならない、とは必ずしも言えないのではないか。まずは、日本語や英語の様々な表現が見せる働きを出来る限り正確詳細に記述することを志す研究もあってよい。この主張をかつてのチョムスキー的エピソードとしての「Taxonomy（分類学）」とか、チョムスキーはじめ生成文法家が好んで口にする「事実の発見とその理論への組み入れはレベルを異にする行為」という言辞の対象としないことが重要である。

たとえば、日本語の助詞「が」が主格のマーカーであるか否かといったことを本稿でも後に考察しようとしているが、ここにはすでに普遍文法の視点がある。主格という言葉には「格」というものが普遍的な文法範疇であるという前提がある。そのような視点が無ければ、そもそも、「主格マーカーであるか否か」という問題設定が起こらない。さらに、日本語の「が」は主格マーカーであると主張されるならば、この助詞は英語の主格という屈折変化形と同一のものの異なった現れである、という主張をなすことになる。また、これは主語とか目的語という概念の普遍性の問題ともつながる。こうして「が」の考察はつねに極めて広大な問題群に絡め取られてしまう。どんなに大きすぎようと、勿論、それに向かって研究は進められなければならない。しかし、視点を変えて、とにかく、日本語の助詞「が」がどのような働きをしているかを、また、英語においてある語が主格に立つとはどういうことかを、できるかぎり丁寧に記述してみる、という行き方も当面ありうると考えてみることはできないか。いわば、「健全なる経験論」である。経験論的言語観やそれに立脚する言語研究はチョムスキーによって完膚なきまでに粉碎された、と見てよい。しかし、方法としての経験主義は今しばらく認め得るのではないか。普遍文法の構築なるものは、実は途方も無く大きな企てなのであって、その射程は本来、人間とは何か、人間の精神とはどのような仕組みをしているのかという、根源的・哲学的問題と表裏一体なのである。さすれば、チョムスキーのようなその精神と実践において純正に西洋自然科学のパラダイムに属するような人物（彼は断じて哲学者ではない：チョムスキーにあっては実践が先にあり、哲学は常に後から主張されるのである：そしてそれは幾分か我が田に水式に行われているという印象は否めない：普遍文法の思想的拠り所としてデカルトが、また、知識の内発説の拠り所としてプラトン〔の『メノン』あたり〕が持ち出されるのは生成文法の歴史においては、その実践の後期である：）による言語研究が順調に着実に、つまりは物理学や化学のように、発展し得ると考えることは本来メガロマニャックな心性でもあるのである。人間の精神的営為のうちで、言語と呼ばれる部分に関してのみ自然科学的な説明が大成を収め得るのだ、と主張することは創始者チョムスキーには許されても、余人が輕輕にその尻馬に乗れるようなテーゼでは本来ないのではないか。精神の研究の側に身を置く人々（つまりは、例えば哲学者）からすれば、依然として言語は記述的な研究対象であるよりは「その権

利問題」すなわち『『言語は如何にして存在可能であるか』が存在論的・認識論的に問い返されねばならない』（廣松 1979 : 90, 99）対象なのである。人間の精神そのものの本性に対して、言語の研究がまさしく実証的・経験的（empirical）研究によって光を投げかけるのだ、というのがチョムスキーの立場であるが、これは基本的にイデオロギーと言ってよいものだという可能性は残っている。

本稿は以上のような観点に立つ日英両語の観察のこころみである。普遍文法的なアプローチを戦略的に一時棚上げにして、両言語の文の基本構造の比較・対照という観点からして重要と思われるトピックを論じてみたい。そのようなトピックとして、上にも言及した、しばしば「主格マーカ」と称される助詞「が」や、また、「主題マーカ」と断じられることの多い助詞「は」についてまずは考察してみる。普遍文法の枠組みの中へこれらの助詞の文法を捻じ入れてしまおうとすること、これらの助詞を「主題」や「主格」と断じてしまうことは、Kisse (1981) のような分析に典型的な例を見る。彼女に拠れば、日本語の文の基本構造は



のようなかたちをしており、 $[X^a, \bar{S}]$  および  $[X^a, S]$  によって定義される関係がそれぞれ主題と焦点という談話機能を担っているとする。彼女が論文中に引く日本語の事実はなるほどこの図式に収まるようであるが、日本語の二つの助詞が絡むところに見られる多くの事実がこれで掬い取られるものとは思えない。もとより、時期的には古いものであり、定説化しているというようなものではないのであるが、また、より具体的な幾らかの批判・検討は後のこととして、これらは、二つの助詞の日本語における現実の（当面、複雑微妙な、と形容し得る）働きを大いに無視したところで成り立つ論であると考ええる。

1.1.0. 本論に入る前に述べおくべきことが多くある。本稿の考察はあきらかにある微妙なスタンスの上に行われるものであって、それなりの方法論的序説を必要とするものである。はなはだ、迂遠にして歯痒なる論述に寛恕を乞いたい。

1.1.1. 例えば、ひとつの英文を日本語に訳してみる。ジョンはメアリーを愛している。ジョンがメアリーを愛している。このお馴染みの助詞の使い分けは、人口に膾炙すること夥しいだけでなく、確かに、日本語の文の基本構造にまつわる問題であろう。さて、文脈を考慮すると、概ね、上の二つの訳し方のどちらが適切かは解かる。しかし、ひとたび、もう一步だけ突っ込んで、問題を一般化してみようとするとき、事態はそれほど明瞭でもない。急いで、日本語文法を紐解いて見る。必ずしも事態がより明瞭になるわけではない。そこで、様々な（例えば、西洋言語学の枠組みの）研究論文でこれらの日本語の助詞の分析を試みているものとお付き合いしてみる。すると、要するに、日本語の助詞の仕組みはまだよく解からないのだ、ということがあきらかになってくる。で、伝統的な国語学に即した助詞の研究も恐々瞥見してみる。そこにおける助詞の研究は、西洋言語学とは異質の枠組みを歴史的背景に持っている、ということが解かる。結局、見えてくることは、予想外の問題の深さである。普遍文法という目標はそ

それはそれとして追求されるべきだ。しかし、日常的なレベルでの母語や外国語との付き合いのなかで遭遇する疑問の多くに対する答えがそこに用意されていない現状も認識されるべきなのである。

ここに普遍文法からはいくらか距離をおいた比較研究の余地を見出し、それを幾らか実践してみよう、というのが本稿の試みなのであった。どんなときにどんな表現が使われるのか、ある程度表層的なレベルでの観察は十分意味のあることのように思われる。

1.1.2. この営為は基本的に意味論的な研究であることをまず確認しよう。ひとつには、「木」という単語は何を表わすか、と問うことが「木」の意味記述であるならば、助詞「が」の表わすものを問うこともまたその意味記述である、といわなければならないだろう。また、普遍文法を一旦棚上げするからには、二言語間の比較対照を「統語論的な」と呼ぶことは実は原理的な困難に遭遇するはずである。統語論的な問題設定（つまり普遍文法）からのストラテジックな一時的離脱という意味で本稿に言う比較研究は一種の意味論たらざるを得ないということになる。勿論、助詞の分布や文中の他の要素との適合性等を論ずる時、それは依然として統語論ではあるが、助詞そのものの働き、使われ方を観察する時、それは意味論的な性格を強くおびる。英語の文において、ある名詞が主格におかれて文中に登場するという時、それはどのような「働き」をさせられているのか、と問うならばそれは「主語」の統語論的・普遍文法的な性格付けとの関連を一時棚上げにして、主語の「意味」（勿論、いわゆる  $\theta$  役割  $\theta$ -ROLE とは違った意味で）を問うているのである。勿論、「意味」という用語・概念もここに到ると最広義のものではある。

文は幾つかの語が一定の統語的構造で連結されたものである。語の持つそれぞれの固有的意味に一定の統語的枠が与えられて出来上がっている「文」はある「意味」を持つ。語彙項目という変数が統語的構造という関数によって写像されたものが文の「意味」であるとしよう（フレーゲ的な compositionality の原理）。これを自明の真理と前提するならば（必ずしも自明の真理ではないという可能性については：野本 1997：87 参照）、「文の持つ意味マイナス各語の意味の総和イコール統語構造の意味」ということになる筈である。各統語構造の意味という視点・問題意識は現在の様々な流派の言語記述において殆ど問題にされていない側面だということもここで確認しておこう。

例えば、(英語における)「主語」という文法的枠はいかなる働きをしているのか、と問うことが出来る。入門書ではあるが Gee (1993：P. 396) が「文の主語とは心理的主題 (psychological topic) であり、談話における情報構造の処理装置の一要素である」というような論はそれを目指して、情報の新旧等の談話構造の中での働きに主語の「意味」を見出そうとしているものである。ここに見るように「意味」を最広義に捉え、統語論の問題としてよりは、意味-働きという点から、日英両語における、助詞や主語・述語などの事象を観察・記述しようというのが本稿における「比較とは意味論である」の謂いである（勿論、このようなものを体系的に議論する能力は無いのであるが）。

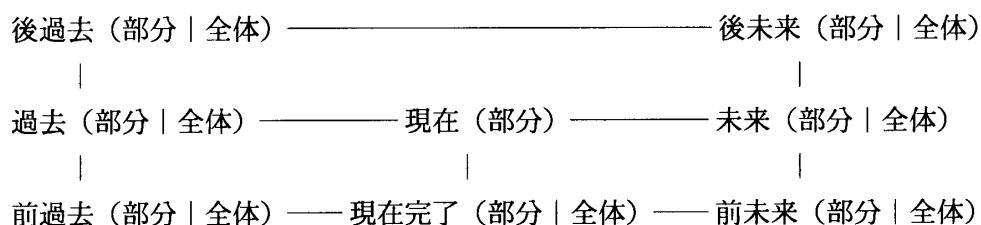
本稿のアプローチは方法として統語論を一旦括弧に入れるという現象学的還元とでも謂うべきものなのであった。しかし、それ以上に、意味記述論は言語構造に対する基本的な認識に関する原理的主張でもある。主部／述部という「文法的構造」は「何を表わすか」と問うことは、その答えることの難しさはさておいて、有意の問題設定であろう。「木」という単語が日本人の生活世界 (Lebenswelt) のある一部分の「切り取り (勿論ソシユールの意味で)」である

がごとく、主部一述部という構造もまた、「事態の集合（ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』、あるいは廣松渉の『もの・こと・ことば』など）」たる世界のある「切り取り方」である（切り取りと切り取り方は違ったレベルのものであり、このこと自体はまた重要な論点として再説しなければならないが）。全体として言語は世界を語るためのものであるならば（これもまた自明の真理ではないのであるが）、文法構造にせよ個々の語彙項目にせよ、それらは共に人間による世界の切り取り方という意味で「それが何を表わしているか」という問いの対象になり得るのである。

前段の議論ははなはだ朦朧、という印象を与えているかもしれない。言語とは「音形」と「意味」の一定の結合を作り出す仕組み、という言い方はおそらく普遍的に受け入れられるだろう。しかし、「意味」とは何であるか、ということは実は言語学者の間で殆ど議論されることはないし、したがって、「意味とはかくかくしかじかのものである」という共通の認識も存在していない。ここに意味に言及する論の曖昧性が宿命づけられている。上に主張されているのはそのような言語研究におけるギャップを埋めるものとしての、「意味論的な言語の対照研究」を（視野の前方には）据えているつもりなのであり、そしてそれゆえに一部の読者には何を問題にしているのか解らないという印象を与えるものとおそれる。

（幾らか古い生成文法のモデルで言えば、）始発記号Sから順次文の構成素が展開されて行き、語⇄終端連鎖の列が産み出され、それが、音形解釈と意味解釈部門の入力となる。この図式において音形解釈部門は比較的問題が無い。しかし、意味解釈部門とはどのようなことをなすべきものかはそれほど明確なヴィジョンは無いように思われる。そして、意味解釈においてなされるべきこと、あるいは文の持つ意味そのものに関して事態がより明らかになっていく時、意味解釈部門への入力そのものの構造に対する大幅な見直しが必要になるということは十分論理的に可能であろう。意味を論ずることは、出発部分で、原理的な困難が待ち構えており、多くの文法理論は可能な限りそれを避けることによって成り立っている、ということは、おそらく誰もが心の中では承認するに違いない。原理的な困難さに立ちすくんでいるより、とにかく、先に進んでみよう、という意志が現在の言語研究を成り立たせているのであり、そして、そのこと自体に学のありようとして不健全なことは何も無い。言語学に限らず、研究とはすべてそういうものだ、とも言えるであろう。ただ、このような確認は別のアプローチの可能性も容認させるべきなのである。

こういった文法の構造そのものにおける意味の問題とは別の面で、文の意味解釈が音形解釈よりはるかに問題が多いことも、現在行われている日本語研究の姿に少しくふりかえてみよう。例えば、日本語の「タ形」に関して、町田(2001)は、



というような普遍的な図式を設定して諸言語においてこれらの要素がどのように現れているか、とりわけ、日本語ではそれぞれどんな表現が対応しているかを論じている。優れた研究者でなければ書けない内容の論考であることを認めつつも、ここで展開されている論のある面には首を傾げざるを得ない。上のような図式を理想体系と呼んだ上で、日本語の時間に関する表現ス

テムを、

過去〔部分 | 全体〕—— 非過去〔部分 | 全体〕

とし、「理想体系に比べると非常に単純である。しかし、日本語も言語の一員である以上、理想体型によって表示され得る事態の時間的性質を、この単純な体系によって表示していると考えなければならない」と述べる（P. 23：傍点は筆者）。かくて、「タ形」は

〔過去 | 全体〕 太郎は昨日公園で走った

〔前未来 | 全体〕 太郎が走った後で、...

〔前過去 | 全体〕 ...前に、太郎は公園で走った

のごとく理想体系で想定される十五の機能の幾つかを受け持っているのだとされる。しかし、理想体系とは何の謂いであろうか。おなじみの

日本語           これ——それ——あれ

英語            THIS———THAT

に見られるように空間の切り取り方に言語間の違いがあり、そしてどれが理想的であるなどという事がないように、時間の切り取りに普遍的かつ理想的な体系というようなものがあるのだろうか。そして、そもそも、「時間」とは何であるのか。すでに哲学的問題であり、いまだかつて明快に答えられたことのない問題ではないか。時間に関しては、表わされるべきものが先験的に決まっており、各言語はその枠に合わせて簡略な（日本語）あるいは理想体系に近い（英語）システムを持つのであるという考え方そのものは何によって根拠付けられているのか。まずは、各言語のありさまを正確に記述していくこと、とは対極的な思考・志向がここにみられるのではないか。言語の形式と意味に関して、ひたすらの独断や結論先取りを感じると言えば失礼だが、言語と世界の関係に関して、ここに非常なナイーブさを見て取らざるを得ない。

言語の比較研究がある種の意味記述である、ということのはらむ困難／問題に対しては次々節でたち帰る。

1.1.3. 日本語の文法の議論と英語のそれを比較したとき誰もが感じざるを得ない、そして、にもかかわらず、そのことが深く議論され、その意味が十分認識されているとは必ずしも言い難いことがある。日本文法研究における、文法性判断 Grammaticality Check につきまとうもどかしさである。日本語文法のある側面について何らかの主張を為すために著者達が提示する例文は常に微妙にして絶えず危うげである。これは、文法的に正しい語列なのか否か。他方、英語の文法を論ずるときに提示される例文は比較的その正邪が判明である。この彼我の差は一体何を表わしているのか。

勿論、言語学の方法論的レベルでの、文法分析におけるデータの果たす役割についての議論は、チョムスキーがアメリカ構造主義におけるいわゆる「発見の手順 discovery procedure」を否定した時点で決着がついている、と本稿は考える。データから理論が引き出されるようなアリゴリズムはありえない。このことはあらゆる経験科学においてそうである。また、データはつねに間違っている、しばしばミスリーディングなものである、という可能性は殆ど公理的前提である。データはただ理論構築の過程で参考にされるだけである。ある文法性判断それ自体が正しかったか否か、つまりはデータがどの程度の精度（そしてそれゆえ信頼性）を持っていたか、は理論が完成した時初めて理論からの逆照射によってあきらかになる。チョムスキーいうところの「解明の原理 principle of explication」である。従って、本稿が今問おうとしている彼我の差は学理上・方法論上の問題ではない。両言語間における言語的性格の違いである。

日本語研究におけるデータの不安定性を大いに論じている筆者が知る限り唯一のものがドメニコ・ラガナの著作である。その一つ『これは日本語か』にもとづいて少しく見てみよう。ラガナはイタリア系アルゼンチン人で、日本語で話し、書くための能力を身に付けるべく悪戦苦闘した経験を持つ。彼によると、アルゼンチンで独学する日本語学生たる氏を助けてくれるまともな文法書は存在しなかったのである。そして、それだけでなく、言語学者の例文がまた、前々段に述べたような状況だった。来日を果たし、大学で教える立場になって、それら日本語研究者（主として久野暉、他に井上和子、柴谷方良）の例文を学生にチェックさせ、その文法性判断における驚くべき不一致に驚く（提示された例文を良しとする者、しない者、てんでバラバラであった由）。このことと、ラガナが同書に引く森有正の日本語論は大いに関係があるだろう。森の発言もまた驚くべきものである。

フランスの大学生に日本語を教えることは非常に困難である。...

... 一番大きい困難は、日本語は、文法的言語、すなわちそれ自体の中に自己を組織する原理をもっている言語ではない、という事実にある... これは相対的なことであるかも知れないが、日本語では、その非文法的である度合いが甚だしいのである。... 理屈としては、役に立つ文法の規則を作ることは不可能ではないであろう。しかし、その場合は、規則は極端に煩瑣となり、もうそれは規則というものではなく、実際の文例を真似することとそれほどちがわなくなってしまうのである。

（ラガナ書 pp. 35-6：原典は森有正「経験と思想」『思想』10 No. 568）

日本語には文法が（殆ど）無い（に等しい）と言っているのである。文法学者、言語学者は卒倒するであろう。森はまた、次のようにも言う。

...日本語に規則を樹て、変でない日本語を書きうるようにしようとすると、規則は現実と同じように複雑になり、規則の規則としての特性が失われてしまう恐れがあるのである。助詞は、その数は限定されてはいるが、あるいは独立して、あるいは互に組み合わせられて、殆ど無限に複雑で予測できない現実のニュアンスを映す作用をもち、またそういう無限の可能性を含みうるものとしてのみ観念されることができるのである。ただし、その「無限の可能性」は「現実」のそれであって、助詞に内在するものではない。助詞はそのもつ方向性のみによって分類されうるもので、その内容としては無限定の現実を映すという規定できない性質をもつのみである。だからそれは、英仏語などにおける前置詞、前置句、あるいは後置詞などと違って、言葉の内部の一部であるよりも、言葉と「現実」とを結びつける紐帯の如きものである、と言った方がよいように思う。しかしこの点は更に詳細に考察する必要があるであろう。しかし、今からすでに言えることは、この紐帯が言葉と現実とを結びつけるものである、ということの意味である。それは、この紐帯によって、現実と言葉とが関係をもつということではない。現実と言葉とは始めから関係していて、それを更めて言うのは無意味である。ここで言う紐帯とは、それによって「現実」が「言葉の世界」に嵌入するという意味である。換言すれば、「現実」が「言葉」の一部になる、ということである。私はそれを日本語における「現実嵌入」と呼びたいと思う。私はこれが、日本語を非文法的言語にしている一番大きい理由であると考えている。

（ラガナ書 pp. 144-5：原典は森有正「経験と思想」『思想』10 No. 568）

上の引用に較べて抽象的観念的で、その真意をつかみにくいところもある。また、いくらか気持ちは解からぬでも無い、あるいは、場合によっては、日本語の特性に関して一面の真理をつ



いている可能性も無いではない（この点については後にいくらかふれる）、とも感じるが、つまるところは前のものと同趣旨。言語研究者にしてみれば、言語道断、もっての他としか言いようがないものかと思われる。この森説に仰天した川本茂雄がこれに反論しているものもラガナは引用しているが、ここではその結論部分だけを引いておけばよい。

... 森氏の意味するところは、日本語の文を一つ一つ取り出してみると、それだけでは解釈が不可能ないし困難なことが少ない、ということであろう。... そういう種類の文が... 日本語では目立って頻繁に出現するというのであれば、事実に近い指摘で... 首肯することができるし、それは日本語の文構造は言語的・言語外的文脈に依存することが大であるということになる。

（ラガナ書 p. 148：原典は川本茂雄「日本語の文法の特徴」金田一編『日本語講座』第一巻）

森に「日本語には文法が無い」と慨嘆せしむるところの最大の要因は、日本語の文法構造がその枢要な部分において未だ未解明な点にある、と思われる。解からないものというのはやたらに複雑に見えるのは世の常である。ついで、大きい要因は明示的な文法は西洋語のそれしか我々は知らない、ということである。英語とは違う面も多く持っているであろう日本語のその文法を英語の文法のイメージでしか想像し得ない時、日本語はわけのわからない言語に見えるに違いない。しかし、その二点を今はさておくならば、川本の論はほぼ、森への適切な反論となっているであろう。日本語の文は文脈に非常に鋭敏に反応する。どんな場所でどのような使われ方をしているかを、頭の中でシミュレートしてみてもはじめて、ある文が文法的であるか否かも明確に判断できる、ということは日本語の文法を多少なりとも考えようとする者が必ず経験することであろう。従って、ある日本語研究論文において、例文として紙の上に印刷されているのは問題のその文だけであるのだけれども、その著者の頭の中では、その文は、カクカクの状況でシカジカの意図を持って... という大量の情報に包み込まれているに違いない（しかも、その情報の大部分を著者自身が意識していないことが多分多い）。問題は論文の読者がそれと類似の情報をただちに頭の中に再現するか（できるか）どうかであることも多い。

太郎が来ましたか Did Taroh come?

太郎は来ましたか

太郎がいますか Is Taroh here?

太郎はいますか

太郎がいませんか Isn't Taroh here?

太郎はいませんか

ある文が文法的であるか否か、と問われるとき、カクカクシカジカの意図の文としてその文が良いか悪いかが問題とされる。上の日本文は、どんな文脈で何を言わんと使われているのか、あるいは如何なる文脈でも使い得ないのか、判断を求められるのはそのことである。単に語列として日本語の中であり得るか否かが問題でないし、更に、そもそもあり得るかどうかと、結局、そんな語列が使用し得るか否かであって、語列として有り得ると答えるためには、頭の中で、コンナ状況デアンナ意図ノ文トシテ使エルナ、という確認が無意識的にせよ無ければならない。これは想像以上に困難な課題である。日本語の研究においては、いわゆる NATIVE CHECK も絶望的に役に立たない場合すら出てくる（現に多くの日本語文法研究書において著者がアステリスクをつける文は、文脈を工夫することで、あり得る文になってしま

う、ということがままある)。英語の文は丈夫な革張りで文脈に投入されてくるのに対して、日本語の文は殆ど表皮を持たず神経を剥き出しにしており、外部の刺激に鋭敏に反応しながらたち現れてくるのである。何の介添えも無く論文の例として単身その身を曝け出さねばならなくなった日本文はまことに痛々しい。そして、これが、また、(主として西洋言語学の枠内の)日本語研究における悪名高き例文の不自然さ・奇天烈さや研究者間の文法性判断の不一致を生み、森有正をして、「日本語には文法が無い!」と慨嘆させることになる(あるいは、それらの重要な一因となっている)のであろう。

以上のこと自体が類型論や一般言語理論の研究テーマに十分なりうる一つの重要な事実である。まだ、それは十分に考究されていないテーマでもあろう。文脈への過敏さの一因としては、ヨーロッパ系の言語に多い主語優位性に対する日本語の主題優位性と呼ばれる性格があるだろう。主語はあくまで一文内で完結させ得る概念であるのに対して、主題というのはいわゆる談話構造、すなわち連続する発話の流れと深く関る。現代的な文法研究においてこの主語優位と主題優位という二大言語類型に深く意が払われるようになったのはそれほど古いことではない。これを本格的に議論するものとしては Discourse Configurability の名で各種言語の主題優位現象を論じた Kiss (19xx) の論集があるが、残念なことにここには日本語を論じたものが収められていない。また、枠組みが完全に統率・束縛理論、原理とパラメータのアプローチで統一されていることもあって、本稿では、あまりその論を取り入れることが出来なかった。

文脈への過敏さはこの主題優位性だけが生み出しているものでは勿論ない。

太郎は弟に本を買ってやった

太郎は弟に本を買ってくれた

もっとも自然な解釈、日常的にあり得る文脈内で見た場合、第一文において弟は太郎のそれであり、第二文では話者のそれである(例文は Kuno1978 を参考にした)。文中に話者が登場しなくとも、文の背後には常に話者がいて、表現に影響を与える(話者の弟が受益者である時に、～シテクレタと話者自身が間接的受益者として顔を出す)。類似の現象が英語に無いというわけでもなからうが、その程度は二言語間で大いに異なる。また、

国宝級の仏像を盗まれた

国宝級の仏像が盗まれた

第一文は話者が仏像の所有者(あるいは保管の義務を負うなどの関係者)であることを強く含意している(例文は水谷 1985 による)。対して、第二文は「他人事」的表現である。ヲとガという助詞(たった一文字)の違いが仏像の所有者まで明示してしまう。表現のすぐ背後に絶えず話者が見え隠れするこの日本語の性格もまた文脈過敏性に貢献する事象のひとつである。また、敬語等の豊かさは、絶えず眼前の話者との相対で言語表現がコントロールされなければならない、ということでもある。これによっても日本語の「文脈嵌入性」は増すことになる。日本語には自称詞・他称詞はあっても代名詞は存在せず、話し手が自分を表現するのにもつねに相手や状況に合わせながら、ワタシ、ボク、セッシャ、さらにはセンセイとかトウサンと使い分けねばならないという事実も同断である。

何に由来するにせよこの文脈過敏症・文脈嵌入性は、日本語を論ずる際の困難の一つとして、まずは、指摘しておかなければならない。後の論ではこういった日本語の性格を生み出す一端には言及することになるであろう。とりあえず、例文提示のむずかしさをここで強調しておき、個々の例文ではあまり注釈めいたものをつけない。以下の例文はすべて筆者の文法性判断に基

づくか、または、引用されたそれは原典の著者の判断を尊重しつつ、利用されている。ラガナ＝森談義の意味は、勿論、例文提示だけでなく、そもそも言語現象の観察における難しさ、を示しているのだということも言うまでもない。以上のようなことを述べたのは、助詞「は」や「が」を論ずる時、以上のような日本語の持つ性格が非常に重要な関りを持つであろうからである。どのようにそうであるか、などという問は、自明のこと、と退けても良いのではないかとと思われるが、一言で言えば、例えば助詞「は」はもっとも文脈過敏な問題なのである。

1.1.4. 言語学の現状、日英語の基本的な性格の違い、等々の困難と何らかの折り合いをつけつつ、日本語と英語のもっとも基本的なレベルでの文構造の違いをとにもかくにも捉えようとするとうなるか。とりあえず、これが本稿の最初の考察対象となる。そして、上に見たように、それは必然的に統語論的ではなく意味論的な性格が強いものになるのであった。それに向かって、以下ではまず、日本語の助詞の意味・用法について幾らかの英語との比較をまじえつつ論ずることになるが、そこでの記述が曖昧にして模糊たるものであることは否めない。もっと明確で形式化された記述であるに越したことはないのであるが、意味ベースの研究の宿命でもあることを確認しておきたい。優れた分析家にあっては、もう少し瞭然精緻の記述を為し得ると思われるが、問題は分析の能力のみにあるのではない、ということ、積極的な主張として本稿は持つ。これには、チョムスキー言うところの PHILOSOPHY（ひとまず、ある言語の問題の構造をとにかく正しく捉え得たかどうか）と EXECUTION（それに最も理想的な明示的記述を与え得たか否か）の区別という面もあるが、問題はいま一段深いものでもあると考える。

すなわち、ある語の意味を記述するとはどのような行為であるのか。

ウィトゲンシュタインは「言語で言語は語れない」と言う。また、これとほぼ等義に「語の向こうには何も無い（『意味』などというものは無い）」とも言う。話者がある語を正しく使いこなせるということの基盤として、我々は、話者の脳内にその語の意味記述を想定する。いわく、ホン（本）という語が使いこなせるのは、話者の脳中にこの語の定義なり、意味内容なりが書き込まれているのだ。もっと、直裁的に言えば、脳内に辞書があるのだ、という漠とした思いが一般的にある。「語の向こうには何も無い」は「『意味』などというものは無い」の謂いであり、また、従って脳内辞書を否定するのである。ウィトゲンシュタインが正しければ、我々は「脳内辞書のファラシー」に冒されている、「意味のイドラ」に奔り込んでいる、ことになる。

（唐突だが、）強制収容所を生き延び、つねに人間の尊厳を臨床と理論の基盤においた精神医学者V. フランクルの興味深い言葉がある。「かつて人間は自己を作り出した自己より高いもの、すなわち、神の似姿において自己を理解していたが、今は自己が作り出した自己より低いもので自己を理解しようとする。」（講演集『意味への意志』）こうして、例えば、人間はおのれの身体の仕組みを様々の機械の仕組みと同列にとらえ、就中、己の脳の構造を論ずるにコンピュータの構造になぞらえることを以てしようとする。フランクルにとっては、かくて歪んだ非人間的なる（精神）医療（例えば物理療法の多用乱用）が生み出されることになるのだが、人間の言語への理解も同断の轍を踏んではないか。かつて、言葉は神の力そのものであった。「光あれ」と神が言えば光があったのである。そこでは『豚はあのように汚いから豚と呼ばれる』（Salomon1966）のであり、ソシュールの記号の恣意性など出る幕もなかった。今、言葉は脳内の辞書である。辞書とはまさに自国語辞典であれ、外国語辞典であれ、日常の言語活動

の便の具であり、人間が生み出した『文明の利器』の一翼である。

フランクとウィトゲンシュタインに導かれてわれわれが為すべきことは、「脳内辞書のファラシー」の放逐なのかもしれない。そこで少しく脳内辞書の持つ論理的属性を考えてみよう。我々がその存在を想定してしまいがちなこの脳内辞書なるものはどんな「姿」をしているのか。まず、辞書といえば、我々はなんとなく国語辞典のようなものをまず考える。しかし、脳内辞書が国語辞典であることは、論理的、アプリアリにありえないことは言うに俟たない。ひとつには、国語辞典が、誰もが知っているように、巨大な円環システム、己の尾を食らうウロボロスに過ぎないということがある。語Aの語義を釈するにあたって語Bが用いられ、語Bには語Cが用いられ... どこかで再び語Aに出会う。国語辞典にあってはつまるところ「右」の語義は「左」のその反対であり、「左」は「右」の反対である。このような円環は理論としての資格に欠けるものと今はみておこう（これ自体、自明の真理ではない：自然科学とは違って人文科学はそのような円環的戯れの中でしか語りえないという認識論的立場はどこかでだれかがいかにも主張していそうな考えでもある）。そして、なによりも、「日本語が脳内で日本語で支えられている」などということはあるとあり得ないことである。だから、誰も脳内に国語辞書があるなどとは思っていません？では、どんな辞書だろうか。外国語辞典か。そうではないこともまた言挙げするも愚かなほど自明である。英和辞典とは彼我の語の近似的「対応関係の一覧表」に過ぎない。そこにはそもそも語義を釈するという行為が（原則的には）一切行われていない。そのとおりです、だから、誰も脳内に外国語辞典があるなどとは考えていませんよ？本当だろうか。また、そうだとすれば、どんな辞書を考えているのだろうか。

いわく、boyの意味は [+human], [+young], [+male] 等の意味素性 Semantic Feature の束である（Nida等の成分分析を先駆とし、KatzとFodorが生成文法の後ろ盾を得て展開したあの素性理論である）。この言明は（その論理的性格において）国語辞典であり、外国語辞典ではないのか。この言明が意味をなすためには human や young が何を表すかが明示的にそして、勿論、非円環的に規定されていなければならない。そうでない限りは国語辞典に過ぎない（英語の単語にもったいぶった括弧やプラスマークをつけているだけ）。勿論、[+human] は（意味論という）メタ言語に属するものであり、これをもって英語というオブジェクト言語が記述されているのである。素性の意味（本当はここで「意味」という言葉は許されない：我々はある語の「意味」を語ろうとしているのだから、意味で持って意味を語ることがすでに循環である）は（いずれ）そこ（意味論というメタ言語＝理論）で明確に定義されるのを待っている。ゆえに、国語辞典などという誹謗はあたらなない？さすれば、特殊な外国語辞典にすぎないのではないか。メタ言語とオブジェクト言語という二つの言語間の対応表であろう。この二言語間の対応表のあり方が通常の二自然言語間の対応表たる外国語辞典とは少し形式が違うだけである。この形式の違いが重要だ、などと述べ立てても、外国語辞典にすぎない、という批判は決して免れ得ないことに注意しよう。記述する側をメタ言語と呼んでいるかぎり、永遠にこれは外国語辞典なのである。実際、Katz・Fodorに端を発する意味記述は「英語をマーカー語 (Markerese) に翻訳しただけのもので理論でもなんでもない」と揶揄される運命にあった[郡司 1998 : p. x]（しかし、そう揶揄する論理学・意味論学者達も「言語と外界を関係付ける」理論としての全き意味論の開発に成功しているようにも思えないのであるが）。意味素性理論のメリットは、“that boy is Bill’s sister” が論理的に不整合 (anomalous) であること、“the boy is young” がトートロジーであること、などを明示的に示すこと、すなわちこの種の意味論がま

さに自らの存立を正当化するために持ち出すお馴染みの事象であるが、これらは言語表現間のある関係を述べているだけで、意味そのものを記述しているという根拠にはならない。

… 思うにウィトゲンシュタインは、この描像 [ラッセルの論理的原子論や初期ウィトゲンシュタインにおける複合命題の要素命題への分析のこと：引用者] 全体の契機となり支えとなっている前提は、いわば自分の意味を自分自身でまかなうような記号—— なんらかの仕方でそれ自体に、その意味が書き込まれているような記号—— が存在するというものである、と言いたかったのではないだろうか。しかしこの考えは表だって述べられたとたん、その不整合が一目瞭然となる。なぜなら、記号はそれ自体ではけっしてその（正しい）使用を決定することはできず、他方、意味をどのようなものと解そうと、それは使用を決定するものでなければならぬからである。

というマギン(1990：27)の言葉は素性理論の欠陥を語ったものではないが、現下の問題にもまさしくあてはまる。

(以下次号)

## 参照・引用文献

- Austin, J. L. (1955), *How to Do Things with Words*, Harvard U. P.  
 Gee, J. P. (1993), *Human Language*, Prentice Hall  
 Gordon and Lakoff (1971), "Conversational Postulates", in *Papers from the Seventh Regional Meeting Chicago Linguistic Society*, Chicago Linguistic Society, pp. 63-84.  
 郡司隆男他 (1998)『意味』 岩波講座 言語の科学 4、岩波書店  
 Harris, R. (1988), *Language, Saussure and Wittgenstein*, Routledge  
 橋爪大三郎 (1985)『言語ゲームと社会理論』勁草書房  
 服部・川本・柴田 (編) (1978)『日本の言語学第3巻』大修館  
 廣松渉 (1979)『もの・こと・ことば』勁草書房  
 廣松渉 (1988)『新哲学入門』岩波新書  
 飯田隆 (編) (1995)『ウィトゲンシュタイン読本』法政大学出版局  
 井上和子 (1989)「主語の意味役割と格配列」久野・柴谷 (1989) 所収  
 伊藤邦武「デカルト批判・私的言語の議論」飯田 (1995) 所収  
 泉井久之助 (1967)『言語の構造』紀伊国屋書店  
 川本茂雄 (1985)『言語の構造—フランス語そのほか—』白水社  
 菊地康人 (1995) 「「は」構文の概観」 益岡・野田・沼田 (1995) 所収  
 Keenan, E. and Comrie, B. (1977). "Noun phrase accessibility and universal grammar". *Linguistic Inquiry*, 8: 62--100.  
 Kiss, K.E., (1995), *Discourse Configurational Language*, Oxford University Press  
 Kiss, K.E., (1981), "On the Japanese 'Double Subject' Construction," *The Linguistic Review* 1, pp. 155-170.  
 久野暉 (1983)『新日本文法研究』大修館書店  
 久野暉・柴谷方良 (編) (1989)『日本語学の新展開』くろしお出版  
 Kuno, S. (1973), *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press.  
 Kuno, S. (1978), "Japanese: a Characteristic SOV Language", in Lehman (1978).  
 草野清民 (明治32年)「國語ノ特有セル語法—總主」 『日本の言語学』第3巻所収  
 小林好日 (1960=再版)『日本文法史』刀江書院  
 ドメニコ・ラガナ (1988)『これは日本語か』河出書房新社

- Lehman, W. P. (1978), *Syntactic Typology*, University of Texas Press.
- コリン・マッギン (1990) (植木、塚原、野矢訳)『ウィトゲンシュタインの言語論』勁草書房
- 町田健 (2001)「外国語との対照から時制をとらえる」『言語』30 卷 13 号 PP.18-25
- 益岡隆志、田窪行則 (1989)『基礎日本文法』くろしお出版
- 益岡・野田・沼田 (編) (1995)『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 松村明 (1943)「主格表現における助詞「が」と「は」の問題」『日本の言語学』第 3 卷所収
- 松下大三郎 (1961=1930)『標準日本口語法』白帝社
- 松下大三郎 (1928)『改撰標準日本文法』『日本の言語学』第 3 卷に一部所収されたもの
- 三上章『現代語法序説』くろしお出版
- 南不二男 (1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- Miyagawa, S. (1987) "WA and the Wh Phrase" in Hinds et. al. (1987).
- 水谷信子 (1985)『日英比較話しことばの文法』くろしお出版
- Nemoto, N. (1999), "Scrambling" in Tsujimura (1999) pp.121-54.
- 野田尚史 (1995)「文の階層構造から見た主題ととりたて」益岡・野田・沼田 (1995) 所収
- 野田尚史 (1996)『「は」と「が」』くろしお出版
- 野本和幸 (1997)『意味と世界一言語哲学論考』法政大学出版局
- 奥津敬一郎 (1974)『生成日本文法論』大修館書店
- 奥津敬一郎 (1981)「ウナギ文はどこから来たか」『国語と国文学』58: 5 pp.76-88
- 尾上圭介 (1981)「「は」の係助詞性と表現機能」『国語と国文学』58: 5 pp.102-118
- 大島資生 (1995)「「は」と連体修飾語構造」益岡・野田・沼田 (1995)所収
- マイケル・ポラニー (1980=1966) (佐藤敬三訳)『暗黙知の次元』紀伊国屋書店
- 佐久間鼎 (1951=1940)『現代日本語法の研究』恒星社厚生閣
- Salomon, L.B., (1966), *Semantics and Common Sense*, Holt, Rinehart and Winston.
- 柴谷方良 (1978)『日本語の分析』大修館書店
- 杉本武 (1995)「大主語構文と総記の解釈」益岡・野田・沼田 (1995)所収
- 鈴木一彦・林巨樹 (編) (1984)『研究資料日本文法 5』明治書院
- 竹沢幸一・John Whitman (1998)『格と語順と統語構造』研究社出版
- 田辺正男 (1959)『国語学史』桜楓社
- 時枝誠記 (1951)『国語学原論』岩波書店
- Tsujimura, N. (1996), *An Introduction to Japanese Linguistics*. Blackwell.
- Tsujimura, N. (1999), *The Handbook of Japanese Linguistics*. Blackwell.
- 角田太作 (1992)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 内田賢徳 (1989)「主語をめぐる助詞の用法区分について」久野・柴谷 (1989) 所収
- ウィトゲンシュタイン『哲学的探求 第一部 読解』黒崎宏訳・解説 産業図書
- 山田友幸 (1995)「言語ゲームと体系的意味論」飯田 (1995) 所収
- 山田孝雄 (1936)『日本文法学概論』寶文館
- 山中桂一 (1998)『日本語のかたち』東京大学出版会
- 山田みどり (1984)「助詞の諸問題」鈴木・林 (1984) 所収
- Zwicky, A. et. al (eds.). (1992), *Studies Out in Left Field*, John Benjamins.